

## 父母の憶い出

私は大正五年三月十八日に北海道の旭川で生まれた。当時は市とはいわず旭川区と称し、街の中を鉄道馬車が走っていたという。生家は町中であつたが石狩川に近く、いつか大洪水のあつたときは家中が舟で避難したと、これは後年父から聞かされた話である。そのほかは幼児の頃の記憶はまったくくない。

父の名は佐々木長左衛門、母はとも（旧姓加藤）といった。いずれも宮城県出身で、若いときに北海道に渡ってきた。その頃の旭川はまだ開拓部落で、土地を耕作するものには政府が奨励金を与えて、ただで土地をくれたという。その時分の開拓農家で、後には旭川有数の大地主になった者が、私の近辺に何人かいたのを覚えている。父は一生を貧しい教員で暮らしたから、晩年の笑い話にあの頃百姓になっていたらと語ることもあつた。宮城県加美郡下野目村の百姓家に育つた父は、やはり農家の血が流れていたのかもしれない。だが長姉が家を継いだ当時の習俗から、三男であつた父は早くから農業に見切りをつけ、仙台に出て師範学校に学んだ。当時としては珍しく向学心に富んだ青年だったのであろう。私の知るかぎりの父は物腰の柔らかかで、温和な、どちらかといえば小心な人物であつたが、若い頃は相当の覇気もあつたようで、最初は婿養子に行ったが間もなく別れて、私の母と再婚したらしい。後年私が二高の生徒として仙台に遊学した時分、伯母の口から私の知らない兄がいることを告げられて大変に驚いたことがある。

とにかく旭川に来てから数十年、教育一途に生き抜いた父は、それなりに小さいながら名望を築き、インテリゲンチヤの一人として周囲からも尊敬された。とくにアイヌ教育で立派な実績を挙げ、旭川の名士として知られるようになった。母との結婚のいきさつは一切知らない。しかし、この結婚が父にとっては三回を数える結婚生活のなかで最も幸福かつ充実したものであつたらしい。不幸なことに若くして病死したこの母の記憶は、私にはきわめて薄い。しかし、どうしたことか私には、この母が優れて強健な知性の持ち主でありながら、慈愛に満ちた情操の高い女性だつたという確信がある。父こそこの母のことを語らなかつたけれど、後年母を知る人からその人柄を聞かされて、どんなに私は誇り高く思つたことだろう。

私の記憶は旭川郊外の近文というアイヌ部落から始まる。

今日でこそ北海道観光名所の一つになっているけれど、当時ここを訪れる客は特殊な関心を持つ人以外は少なかつた。それでも加藤高明、浜口雄幸、若槻礼次郎といった著名な政治家をはじめ小川芋銭などの文人墨客が時たま来訪すると、必ずと

いってよいほど私の父が校長をしていたアイヌ人学校に立ち寄り、すぐれた筆蹟で署名や絵を描き残していったものだ。立派な装訂のそうした署名簿を幾冊か積み重ねて、時折それを繰り広げてみるのが後年の父の楽しみであった。そのにこやかな笑顔を私は決して俗っぽい見栄と思ったことはない。

さてそのアイヌ部落だが、旧土人保護法に基づいて北海道の各地に散在していたアイヌ人が何箇所かにまとめられ、それぞれ一定の土地と住家を与えられたのである。殺風景な平野を機械的に区分し、同じような規格の粗末な家が建てられ、そこで彼らは慣れない農耕から生活の糧を得なければならなかった。果たしてこのような半強制的な隔離政策が彼ら少数民族の本当の幸福を保障するものであったかは、大いに疑問の存するところであるが、少なくとも当面生活保護的な一面の作用をもっていたことは確かだ。しかし、それだけでは到底最低の生活も満足に出来ず、出稼ぎや熊狩り、あるいは観光みやげ細工などで細々と生活の資を補わざるを得なかった。その惨めなほど低い生活水準を引き上げるために、まず教育が必要だということになったのだろう。部落の中にアイヌ人専用の小学校が設けられ、そこに多年旭川で教職にあったベテランの私の父が校長として起用されたのである。もっとも校長とはいっても教師二、三人に生徒四、五十人という小規模なもので、私たち親子は学校校舎に付属した住宅に住み込み、母もその数少ない教師のうちの一人であった。だから幼時の私の記憶では、学校と住居とが一つになっていて、生活はその両方に分かちがたく結びついていて、私たち一家の外に、小使いさん一家も住み込んでいて、まるで一つの家族のように行き来した。

広い構内にはポプラや落葉松の大きな樹が茂っていて、夏などはその間にハンモックを吊り、昼寝をしたり、木登りをして暮らしたことを覚えている。ある時は昼間の光に目が眩んだミミズクが迷い込んで窓ガラスを破ったり、ある時は部落の檻から逃げ出した熊が玄関の前にのそっと立ちはだかって家人を驚かせたこともある。広い庭にはクローバーが一面に咲き乱れ、私はよくそこで兄と相撲をとったりした。いわば自然のままの環境が、生活の背景をなしていた。

学校に通ってくるアイヌの児童は、皆みすぼらしい服装で、おまけにきわめて不潔であった。頭髪にシラミを湧かすものも多勢いて、天気の良い日など母が校庭で彼らのシラミ退治をしていた姿を不思議と覚えている。だが、私たちには何の分け隔てもなかった。

一緒に川に水浴びに行き、山にぶどう狩りに行った。竹ちゃんという少年は滅法背が高く、年も私よりかなり上だったようだが、気立てのよい子でよく一緒に近くの山に登っては彼がウドの大きな木から上手に笛を作るのを感じて眺めたもの

だった。竹ちゃんの母は近所にある和人（内地人のこと）の澱粉工場に働きに行っていたが、いつかそこに遊びに行ったとき出来立ての澱粉を焼いてくれた素朴な餅がとても美味しかった。

私たち一家四人の楽しい生活が急変したのは、他ならぬ母の突然の死であった。それまでも時折、街の軍医上がりの元気のよい医者が来ていたが、幼い私には母の病状はついぞ知らなかった。結核という当時世間で最も嫌われた病気のせいもあってか、父もそれを私たちに隠していたし、母も余ほどのことがない限り床についたことはなかった。それが、私が七歳の秋、急に病状が悪化して、激しい吐血に苦しんだ後、ついに帰らぬ身となった。私はその時の異常な光景を今も忘れない。

その時分はまだ珍しかったオートバイに乗って医者が駆けつけてくると、私たち子供は夕暮れ近い戸外に出されたが、大人たちの時ならぬ慌しさが気になって、家に戻ると、私は恐ろしい母の断末魔の苦しみを目撃する羽目となった。あの気丈な母が、苦しみの余りすくっと床に立ち上がり……………あゝ、あの痛ましい光景を私は書くに忍びない。

今日、同じ結核に侵されつつも至極泰平に日々を送っている自分自身と対比するとき、これという治療の手だてもなく若くして逝った母が可哀そうでならない。父の事業半ばで、そして兄と私の二人の子供を残して、最後まで意識鮮明のままあの世に強引に連れ去られた母の無念さが、ひとしお胸に迫るのである。

葬儀はキリスト教で行われ、例によって讚美歌「主よ御許に近づかん」と「山路こえて一人ゆけば」が歌われた。無信仰を自負する私が、今でもこの二つの歌を聞くとすぐ涙ぐむのも、実はこの幼い日の悲しい思い出に結びつくからである。大勢の弔問客が詰め掛けた席をそっと立って薄暗い便所に行き、途中の廊下でハンカチーフで目頭を拭っていた父の姿が、ありありと臉に焼きついている。暗い、遠い山道を棺を担いだ数人が歩きつづけ、その後をとぼとぼ辿ったあの寂しさを何と表現したらよいだろうか。そして死のもたらす不安と寂寥を克服するまでに、なんと長い月日を要したことであろうか。

話がいささか湿っぽくなった。話題を変えよう。

学校の隣に金成マツさんというアイヌの婦人が教会を開いていた。私の両親もキリスト信者だったので、早くから私たち兄弟もその日曜学校に通わされた。キリストの教えについては当時なにも分からず、ただクリスマス日の華やかな賑わいやプレゼントが楽しかった。黒と黄色の段ダラの毛糸の襟巻きを貰ったのを今も覚えているところを見ると、よほど珍しく嬉しかったに相違ない。

ところで大事なのはこれから先の話である。金成老婦人は白老村の出身だが、早

くから札幌に出て、有名なバチェラー博士に師事したことがあり、その導きでキリスト教に帰依した人だが、実はこの人が大変な伝承者で、アイヌ文学の白眉といわれる叙事詩ユーカラを後に金田一京助博士に口授した人である。その縁を結んだのが他ならぬ私の父だった。それも、それほどの大切な秘伝口授が行なわれるとは知らないままに……………

事の経緯はこうである。若き言語学研究者として近文部落を訪れた金田一博士は、冬の日金成媪を訪ねていろいろとアイヌ伝承を聞いたが、さて一夜の宿ということになって隣の小学校長である私の父にその旨頼んだところ、どうした事情か拒わられた。その仇が却って一夜を寝もやらず金成さんと話し明かす縁となり、その中から図らずもユーカラを発見したのである。長編叙事詩ユーカラはこうして世に出ることになった。もっとも金田一博士の大業を完成させるには、この金成マツさんのほか、彼女の姪の知里幸恵（北大教授文博 故 知里眞志保氏の実姉）という才媛の絶大な協力があった。この辺のいきさつを金田一博士自身がその随筆のなかで「宿貸さぬ人の情けにて……………」と、後年感謝をこめて書いていられるが、同じアイヌ研究に志したはずの父としてどうしたことかと、実はその子の私が冷汗をかく思いをしているのである。後に私が東大の法科学生となったとき、父の話もあって文学部教授の金田一先生を訪れようと思ったことが何度かあったが、ついに意を果たさぬまま今日に至っている。父はもう他界して二十年近くなるが、高齢なおかくしゃくとしておられる金田一先生にぜひ一度お会いして、父に代わりあの日のお詫びをしたいものと考えている。

ともあれ、母の亡くなった翌年の春、私は近くの小学校分教場に通うようになった（もちろん和人の学校である）。晴れ姿を母に見せられなかったのは残念だったが、月日は次第にその悲しみを和らげてくれた。男手一つの父が母代わりに愛撫の手を私たち兄弟に注いでくれた。夜は兄共々父の布団にもぐりこんで寝たものである。

学業は楽しかった。一年上の兄がいたもので、私はいつもほとんど先に進んでいた。分教場は二部、三部授業で、上級の学年の授業がいやでも私の耳に入ってくるし、これという苦労もなしに新しい知識が身につけられた。ただ私は親子三人の生活が淋しかった。末っ子で、肉親の死を身近に味わった人間として、私はよくこう考えたものだ。

父が死んで、兄が死んで、私一人になる。どうしよう……………

その心配は杞憂だった。

数年後、父は後妻を貰うことになって、新しい母が一人の女兒を連れてきたからである。父が再婚したのには、それなりのロマンスがあったらしい。登別からの視

察団に加わっていた新しい母との間に、幾度か手紙のやり取りがあったようである。しかし、それは私にとってはどうでもよかった。新しい家族が増え、とくに年下の妹が忽然と出現したことは、私たち一家の淋しさを和らげるとともに、何よりも私の死への不安を解消してくれた。もう大丈夫、私の後がいる。そこで私はこの妹を大変に可愛がった。

その頃は第一次世界大戦もようやく終わりを告げて、戦時中異常な好景気を謳歌した日本にもやがて不況が訪れた。戦争成金の話や、その没落など世間の話題も賑やかだったが、大きな歴史的イベントであったロシアの十月社会主義革命や日本の米騒動のことなどは直接記憶にない。ただいわゆるシベリア出兵とパルチザン残虐事件などが数々の報道写真入りで伝えられ、シャレコウベの山と築かれた傍らにロシア人が立っている姿が強烈に印象に残っている。また関東大震災の模様を薄暗いランプの灯の下で語り合った記憶がある。

ランプといえば、この頃の旭川ではまだ片田舎の私たちの住居にまで電灯が普及していなかった。それでランプのホヤを磨いたり、芯を切ったりした光景を今でも覚えている。でも次々と近所に電柱が立ち、明るい電灯の光が入るようになって、私などわざわざそれを見に行っただけのものだ。漏電による火事の恐ろしさなどを啓蒙した大きな絵ポスターが、私の住む学校の講堂に貼られたのも覚えている。市内も鉄道馬車に代わってバスが通るようになり、駅前には勧工場と称する賑やかな商店街が出現した。たまに父に連れられて「町」に出かけると、珍しい玩具屋の前を動かなかったと後々まで父に聞かされた。最寄りの近文駅から旭川の本駅まで汽車に乗って行ったことがあるが、あのときの珍しさと喜びも子供心に消えない印象を残した。文明の波はこうして次第に北国の片田舎にまで及んで行ったのである。

父の学校生活とアイヌとの接触はまだ続いていた。だがアイヌに対する国の政策方針が変わったのか、やがて土人学校は廃校となり、それぞれ和人の学校に児童も吸収されることとなった。これに伴って父も、市内にある商業学校に奉職することになり、私たち一家は住みなれた近文の文化のアイヌ部落を去って、町に近いある牧場の傍の小さな家に移り住んだ。

初めての転校と、新しい転居。今度の学校は二階建ての大きな建物と千人近い児童数をもつ大規模なものだったので、私は当初若干の内気な戸惑いを感じたものである。しかし、もっと大きな打撃は庭もないような狭い窮屈な住居だった。それで学校から帰ると一日の大半を牧場で遊び暮らした。図体の大きな外国種の種牛に驚いたり、牛の飼料の人参を倉庫で食べたりした。生活は徐々に変わっていきつつあつ

た。

今から思うと、その時分は父も自分の進むべき途をあれこれ考えていたのではないか。結局その最後の決断として、父は再びアイヌ部落の入口に近いところに自分の家を建て、彼らのために観光土産品を販売するとともに自分自身の生活設計をたてたのである。学校教師と商売の二重生活が始まった。アイヌとの接触は再び深まり、父は自分の使命とも、あるいは趣味ともいえるべきアイヌ研究を実地につづけると同時に、漸く増えつつあった家族を養う生活基盤をみつけたわけである。学校から帰ると商売上の雑務に追われ、しかも夜はおそくまで研究や執筆に専念した父の姿は、一人の平凡な市井人として最高の充実した人生であったと思う。

父のアイデアはある程度当たった。その頃ようやく盛んになった観光ブームのおかげで、シーズンには大勢の団体客がバスでアイヌ部落を訪れ、その行き帰りに父の店で買物をした。そのときは何十人、何百人もの客が狭い店内に殺到し、あれこれとアイヌ細工の土産品を買い漁るのだった。そのため母の応援だけでは足りず、小学校高学年あるいは中学生になっていた私や兄までが借り出された。冬などの間にボツボツ買い溜めておいたアイヌの手芸品が、夏の間のわずか二、三ヶ月の期間に売り捌かれた。そればかりでなく、道内各地の観光土産店や内地まで注文によって大量の品物を発送した。今やアイヌ細工に関する専売的な卸小売店ともいえるべき地歩を獲得した。もちろん、それには父に対するアイヌ人の厚い信頼という深い基盤があったわけであるけれど、これだけ手広く商売を広げる（しかも教師の片手間に！）ことが出来たのには、後添えの妻の並々ならぬ内助の功があったからである。しかし、商売人として、父は決して上手ではなかった。これほど有利な地盤を築き上げながら、利益本位に徹し切れなかったために、その経営は必ずしも順調安全とはいえなかったようである。

まず第一にアイヌに対する憐びんの情から、賃金の前貸し（ほとんど彼らの酒代となって消えた）が多く、取立ても緩やかだったから、ささやかな父の資本では所詮大きな利益を生むほどの経営にはなり得なかった。第二に、父の先見の明で始めた有名な熊彫りに大きな資金を費消したことである。今日、世間に有名なアイヌの熊彫りは、全く父の独創から生まれたもので、彼らの器用な手刀使いに着目した父が、その頃道南の八雲農場の農民たちが始めたばかりの熊や人形の一刀彫りに倣い、わざわざその途の専門家を内地から招へいしてアイヌ人たちに熊彫りを習わせた。器用な彼らも、最初のうちは豚のような、あるいは鱈のような熊を作った。その習作のような、とても売物にはならないような作品を、父は彼らの生活のために多量に買い取った。多くの無駄を経てやっと熊らしい熊ができ、しかも観光土産として

売行きがよくなると、利にさとい他の商人が折角の父の苦心の仕事を横取りし始めた。創業の苦勞ばかりなめて、その後の繁昌ぶりの恩恵に浴しなかった父は、そのことをサッパリ気にしなかったばかりか、却って多勢のアイヌがこれによって生計を立てるほどになったのを喜んだ。

そんな状況であったから、私が中学から高等学校に進み、父に縁りの仙台で三年間の遊学生生活を過ごすだけの学費をやっと面倒みることができたものの、いよいよ私が東京大学に入って最後の学生生活を送るにあたっては、当時数少なかった育英資金の制度に頼らざるをえなかった。ともあれ、七人兄妹というなかで、次男の私一人が最高学府に学びえたのは、細々ながら片手間の商売で父が苦勞を重ねたからだと深く感謝している。それだけに父の期待が大きかったにかかわらず、卒業後満州に渡り満鉄で働いた六年間、そして敗戦と内地へ引揚げてから父が亡くなるまでの八年間、なに一つ親孝行らしいものをなしえなかった自分を腑甲斐ない人間と口惜しくてならない。

話を元へ戻すと、この旭町時代の私の一家には活気が溢れていた。先に述べたように、父は教師と商売の二股に多忙であったし、母はその手助けと七人の子供の養育に追われていた。この新しい母のことをあまり話していないので、少しふれてみる。

旧姓を広瀬、名を俊と呼ぶ新しい母は、京都の出身で、旧い武家の育ちであった。だから、その時分の戸籍にあった華族、士族、平民という区別でいつも不思議に思ったことは、平民の父が士族の母と結婚して何憚らない世の中に、なぜいつまでもこうした身分差を書き現さなければならぬかということだった。母はいささかそのことが得意のようであったし、さらに当時としては進歩的な同志社に学んだということ誇りとしていた。新島譲という学長の話もしたし、英語も父よりはいささか上のようなようだった。

事情は深く詮索しないが、この母が若い頃東京のある有名な私立学園の園長の家に家庭教師として住み込み、やがて一人の女兒を私生児として北海道の苫小牧で産み落としには深いわけがあったに違いない。ともあれ、その女兒が私のはじめての妹として忽然と現われ、私の不安を救ったことは前述のとおりである。

その後、父との間に三男一女をもうけ、ひたすら家庭第一に過してきた。料理もうまかったし、新しい時代センスも持ち合わせていたので、一家は比較的和やかで明るい暮らしを送っていた。

それが再び暗雲を帯びるようになったのは、全く兄と私の二人の我がままによる。二人が心身ともに成長して、いわゆる第二反抗期ともいべき青春の多感な時期に

入ると、この立派で家庭的な義母との間に何ともいえない溝が生じてきた。擬制上の親子関係に対する血の反抗が、思春期のセンチメンタリズムと結びついて、必要以上に問題を起こし、それをこじらせた。学業成績の良い私は比較的この母と折合がうまくいったが、学業を怠り、次第に不良化していった兄とはとくに対立が激しかった。しかし、世間一般によくあるこの義理の親子関係については、これ以上ふれるまい。

ただこの母が後年まだ四十そこそこの若さで中風に倒れ、五、六年もの長い間病床にあって、半身不随の不幸な生活を送り、ついに私の在満中に亡くなったことは返す返すも気の毒なことだった。私はその葬儀に参列しえなかったが、遙か異国でその便りに接し、気の毒な母のために冥福を祈った。

再び妻に先立たれた父にとって、その後の生活は荆の道であった。

私は遠く離れて満洲にあったので、実情は詳しく知らないが、まず結婚して同居した兄との間がうまく行かなかった。やがて兄夫婦は家を出て下宿し、次に滝川に去り、今もそこに住んでいる。次男の私は、一番大きな負担を親にかけながら卒業と同時に結婚して満洲に行ったきり、経済的援助はおろか普通の音信さえ断えがちである。ただ一度だけ会社からの内地出張の折、旭川の実家に立ち寄ったことがあるが、親の預かり知らぬ結婚をした私の妻との間は依然として冷たかった。妹は女学校を卒業する頃から自分の出生に悩み、いろいろと父に心配をかけるような行跡がつづいた。年老いて次第に気短になった父との間に激しい言い争いがつづき、ここでもなさぬ仲の悲劇が爆発した。次の妹がようやく成人して、実質的な母代わりに幼い弟たちの世話を見、父を助けた。

大東亜戦争は、兄を海軍兵士として遠く海南島、マカオに送り、弟を予科練に送った。その間の父をはじめ、妹や残された弟たちの苦労は全く想像する以外にない。戦争がたけなわの頃、私は満洲に父親を呼び寄せることを提案したことがあるが、ついに実現しないまま終戦を迎えたことは却って幸いだったといえる。世間に申し訳ないほど兄弟全部が無事に大陸から、南の島から、空の特攻隊から次々と帰ってきたとき、父はどんなに安堵の胸を撫でおろしたことだろう。

だが、その安心はまだ早かった。戦後の混乱に加えて、家族間の不信の名残が、一家の団結を阻んだ。兄も私も、それぞれ自分の家族を守り、激しい世相の転変に対応するのに忙しかった。少なくとも私に関する限り、引揚げ後直ちに帰省することもなく、東京に腰を落着けながら転々と職をかえ、父の希望を無視して東京生活を固執した不孝と不明とは、何と詫びようもない終生の痛恨事である。



寄る年波と、期待した息子たちの背反に、父の絶望はますます募っていったのだろう。

一、二度軽い脳出血のあと、精神的薄弱が昂じた。教師の職はすでに以前に辞し、近くの師範学校の図書係の軽い勤務についていたのであるが、それも止めた。商売の方はいつから止めたか聞いていないが、恐らく戦争中あるいは終戦直後に止めたのではないかと思う。私のすぐの弟が父の一切の面倒を見、まだ成人していなかった弟たちを育てた。

その頃一度だけ私は家族連れで帰省したことがある。父の余命がいくばくもないかもしれないことを案じて、弟妹たちが呼んだのである。久しぶりに故郷に帰った私は、敗戦後の旭川の街がすっかり変わり果てたのをみて、悲しく思った。町の誇りであった第七師団はすっかり解体され、その広大な兵舎跡には引揚者の群れが秩序なく住んでいた。爆撃こそ受けなかったが、町が目抜きは薄汚くよごれ、ここにも戦後の混乱があった。ただ根強い庶民の生活力に支えられて、町には不思議と活気が漲っていた。郊外に近い私の実家の辺りもすっかり住宅が建てこんで、昔ののどかな牧歌的自然は薄れていた。だが、一番悲しかったのは、年老いた父がすっかり元気を失っていささか耄碌気味だったことだ。帰省中のある日、父と一緒に近くの伯父の家を訪ねたことがある。その帰り道で、はるか彼方に薄青く横たわる大雪山の峰々を眺めながら、遠い昔に父子で登山したことを思い出し、そのことを話合った。その時も気付かなかったのだが、いよいよ家の前まで来たとき、私に向かって「一寸、寄っていきませんか」というのである。私は啞然として父の顔をまともに見たが、ただにこやかな笑顔できわめて自然な態度である。咄嗟に私はすべてを了解し、これはいけないなあ、と思った。もはや父には正常な理解力さえ欠けていたのである。

このドキリとした一件をそっと弟妹たちに打明けると、実はもうかなり前から進行し、それで急遽私を呼んだのであることが分った。

それからほぼ一年たって、昭和二八年の三月、父は七三歳でこの世を去った。折悪しくも結核を発見されて自宅療養の床についていた私は、この時も再び母の場合と同じく葬儀に参加できなかった。それで私は胸をしめつけられる思いで、今は亡き父の霊前に最後の長い手紙を書き送った。弟がそれを代読し、満座の涙を絞ったということの後で聞いた。哀れな父！ 子供たち（といっても兄と私だが）に報いられず、苦しい戦後の生活に悪戦苦闘し、不遇のうちに死んでいった父よ、なぜもう少し長命して、今日の私の恩返しを受けてくれなかったのか。この時になって始めて、私は「孝ならんと欲すれどすでに親在さず」という古い諺を痛いほど身に味

わったのである。それいらい私は若い人を見るたびに「生きているうちに孝行しておけ」と忠告するようになった。

だが私の親不孝は別として、世間はこの不幸な老教育者の死を手厚く葬ってくれた。父が長年通った教会をはじめ、旭川各界の士が父の生前の業績をたたえ、その霊に深い敬意を捧げた。

今日、旭川市の郷土博物館には、父が蒐集した数多くのアイヌ関係の出土品や資料が保存されている。私が子供の頃見なれた矢じりや刀剣、衣類、酒器などがそこに陳列されている。父が夜おそくまで勉強して書いた数冊の著書とともに、それは永久に父の功績を語り伝えることだろう。

後日、弟の家で聞いた戦前の父のラジオ放送の録音盤は、懐かしい和らかな張りのある声で意外なほどに若々しい力に溢れていた。私はせめてその複製を作って、七人の兄弟たちに分けたいと思っている。（昭和 46.2.4 記）佐々木義（55 歳）

※最後の来旭は、死去する 3 ヶ月前の平成 4 年 9 月末。

この原稿は死去後、すみこ夫人が発見され弟の豊氏のもとに届けられたもので、書いてから 21 年が経っていた。

□佐々木 義 大正 5 年 3 月 8 日生、 平成 5 年 1 月 6 日没（享年 76 歳）